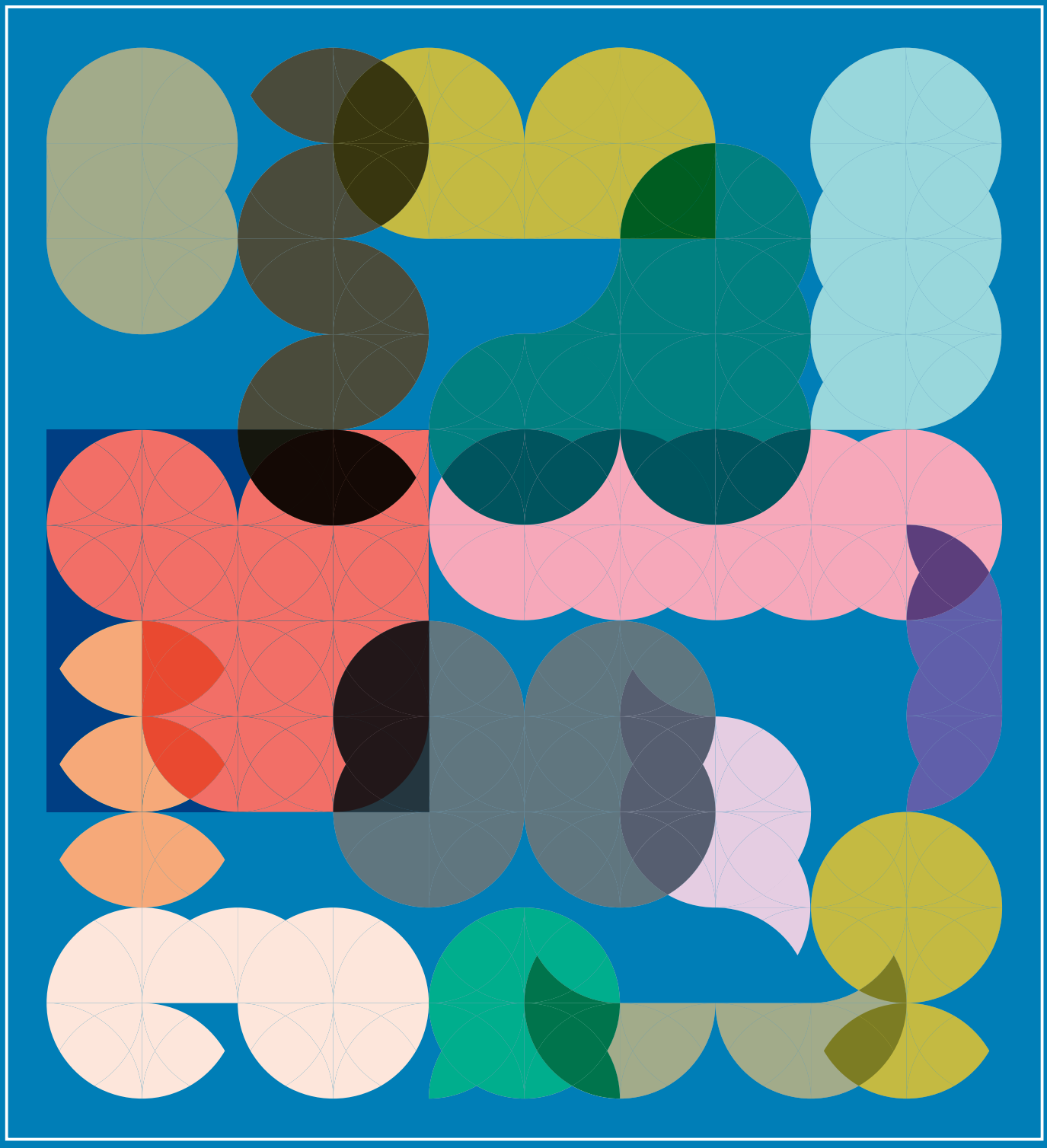
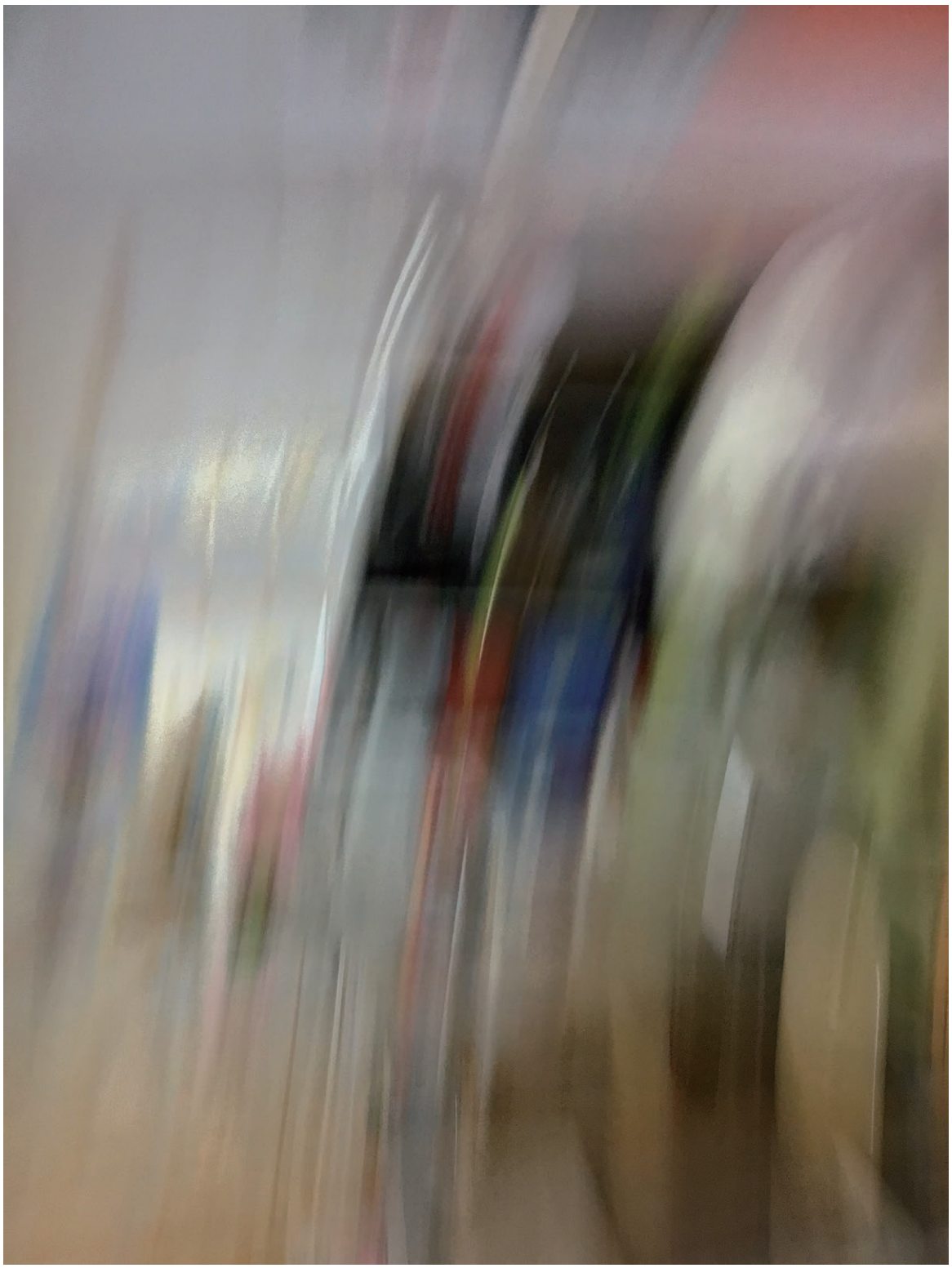
インクルーシブな学校づくり
ハンドブック

2024

特集

バリアって何？





特集 バリアって何？

ピントが合っていないこの写真に何が映っていると思いますか？
この写真はある小学生が学校の教室で撮ったものです。彼は明日の予定が書かれた黒板をメモしようと、タブレットのカメラでこれをとりました。でも、タブレットで写真を撮るのは彼だけで皆は連絡帳に鉛筆で書いています。彼は、みんなとちがう方法が恥ずかしくて、いつも急いでタブレットを出して写真を撮り、急いでタブレットを机の中にしまいます。
だから、写真はいつもピンボケになってしまいます。

この写真をよく見て考えてみると、ここには学校のバリアが映っているように感じます。みなさんには見えますか？
家ではタブレットで写真を撮るのは何の問題もなくできるのに、教室ではそうはいかない。紙に鉛筆で書くのが「普通」になっているから、それ以外の方法は特別で、「普通」から外れたことのように感じられます。
ここに立ちはだかるバリアをなくすにはどうしたらいいでしょうか。
このハンドブックを通して、皆さんと考えてみたいと思います。

はじめに

ともに学び、
ともに育つ教育

本市では、一人ひとりの命の尊さや人としての権利が侵されることなく、誰もが大切にされるあたたかい社会の担い手を育成するため、「ともに学び、ともに育つ」理念を全ての教育活動において大切にしてきました。
Society5.0に向けて社会が大きな転換期を迎え、技術革新が一層進む社会において、多様な人と協働でき、主体的に行動できること、また人間ならではの感性や創造性を発揮し、新しい価値を創造できる人材が求められます。子供たちに多様性を認め合い、周りの人と協働して新しい価値を生み出す力を育むために、教育の場を、今まで以上にあらゆる価値観が尊重される「インクルーシブ」な場としなければならないと考えます。
本市では、令和4年1月に締結した東京大学大学院教育学研究科との連携協定に基づく取組をきっかけとし、これまでの取組を深化させ、子供たち一人ひとりの「いのち」が輝くインクルーシブな学校づくりを進めていきます。

吹田市教育委員会

学校がどの子どもも排除することなくインクルーシブであること、つまり学校がその地域に暮らす子どもにとって安心で楽しく通える場であることは、その地域に暮らす人々共通の願いです。
しかし、それは常にさまざまな問題に脅かされ、みなが注意を払って、協力しつづけなければ、学校がインクルーシブな場であり続けることは困難です。
東京大学バリアフリー教育開発研究センターは、マイノリティにとっての困難を生み出している私たちの社会の作られ方（バリア発生のメカニズム）を見通す社会モデルの視点を地域に広げ、公正な社会の実現に向けて働きかける人材育成に取り組んでいます。
このハンドブックを活用して多くの学校でインクルーシブな学校づくりの実践が広がることを願っています。

東京大学バリアフリー教育開発研究センター

CONTENTS

1…基礎を理解する

01　バリアとは？　6
02　障害の社会モデルとは―環境が経験をつくる　10

コラム　「包摂」の対象はだれ？　12

2…学校で実践する

教材紹介01「バリアはどうしてできちゃうの？」　14

CASE STUDY　教材「バリアはどうしてできちゃうの？」を使って、2年生に1時間の授業をする　15
ポイント　18
Q&A　19

コラム・インタビュー　補助犬とバリア　20
コラム　補助犬とバリアの関係―バリアの回避と除去の違いに注目する
インタビュー　日本補助犬協会 朴善子さんに聞く

教材紹介02「車いすユーザーの社会」　24
教材紹介03「迷惑なのはだれ？」　25

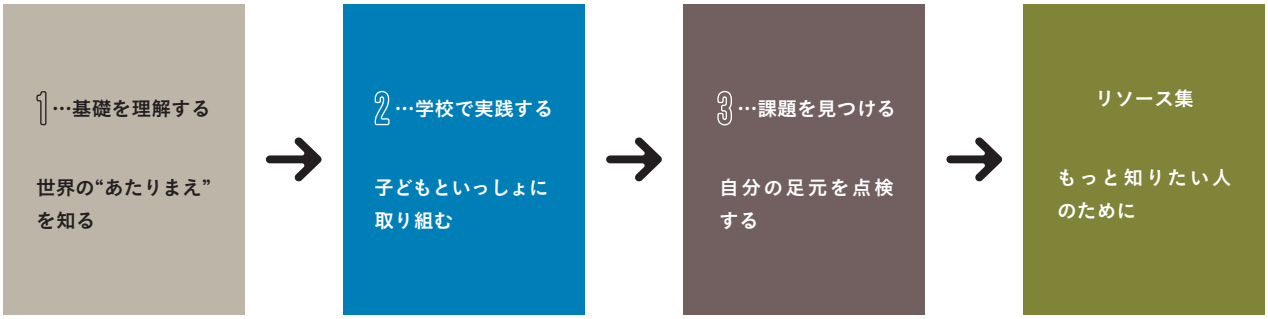
コラム　支援の原理―社会モデルから考える　26

3…課題を見つける

01　インクルージョンの指針を活用する―インクルーシブな学校づくりの歩み　28
02　教員が自分の学校を点検してみる―研究推進校の取り組み　30

リソース集　もっと知りたい人のために　32

ハンドブックの構成



1

基礎を理解する

世界の“あたりまえ”を知る

01　バリアとは?
02　障害の社会モデルとは—環境が経験をつくる

基礎を理解するために 01

バリアとは？

解説：飯野 由里子（東京大学）



「バリア」は段差だけではない

バリアと聞くと、みなさんは何をイメージされるでしょうか。おそらく段差や階段をイメージするのではないかと思います。そして、バリアフリーは、そうした段差や階段を取り除くことと教わってきたのではないでしょうか。この理解も間違いではありません。しかし、バリアはもっと広い概念です。
一般的にバリアとは、障害者が社会に参加する際に邪魔になっているものを指します。障害者が、障害のない人と同じように参加することを難しくしている、社会の側にある様々な要因のことをバリアと呼びます。

社会の中にある「4つのバリア」

日本では1990年代から、障害者白書などの文書の中で、4つのバリアという考え方が広められてきました。物理的バリア、制度的バリア、文化・情報面のバリア、意識上のバリアの4つのことです。

4つのバリア（学校編）

物理的バリア	階段や段差、施設の狭さ
制度的バリア	分離教育、学習指導要領、校則 教育課程や学習活動の内容、学校の教育目標
文化・情報面のバリア	特定の人に伝わりにくい情報提示の仕方（音声日本語のみ） 教材や掲示物／展示物、使用言語 「みんなで一緒に力を合わせるべき」という規範、職場文化や働き方
意識上のバリア	「障害者はいつも手助けを必要としている」という思い込み 「目が見えない分、他の感覚が鋭いはず」という偏見

飯野由里子・星加良司・西倉実季 2022『「社会」を扱う新たなモード―「障害の社会モデル」の使い方』生活書院

Oliver, Michael. 1996. Understanding Disability: From Theory to Practice, New York: St. Martin's Press.

The Union of Physically Impaired against Segregation (UPIAS) & The Disability Alliance. 1976. Fundamental Principle of Disability.（https://disability-studies.leeds.ac.uk/wp-content/uploads/sites/40/library/UPIAS-fundamental-principles.pdf）

物理的バリア

まず、物理的バリアから見ていきましょう。障害者が直面している物理的バリアの中で、一番よく知られているのは階段や段差ですが、最近では特に学校場面で、特定の音や光の環境下では集中しにくいとか具合が悪くなるといった人たちの存在が知られるようになってきました。例えば、むき出しの蛍光灯や天井が高くて広い空間（例：体育館や吹き抜けの階段）での反響音によって、具合が悪くなったり、集中できなくなったりして、活動に支障が出る人がいます。こうした物理的バリアは、目に見える形で存在していることが多く、経験することもできるので、比較的理解されやすいバリアだと言えます。↘

文化・情報面のバリア

3つ目は、文化・情報面のバリアです。障害の領域では、情報提示の仕方に関して、最もよく指摘されます。みなさんはいま、日本語という言語で、日本語の漢字仮名混じりの文字を使って書かれた文章を読んでいます。しかし、日本語の文字だけでは、この内容に他の人と同じようにアクセスできない人がいます。例えば、ふだん点字を使って読み書きしている人にとっては、この文章の内容にアクセスしにくい可能性があります。その他にも、非常に難しい言葉や言い回しを使って書かれた文章だった場合、何を言っているかわからないという人もいるでしょう。このように、私たちの多くがふだん「当たり前」だと思っている情報提示の仕方は、実は特定の人たちにとってのバリアになっている可能性があるのです。

文化面のバリアの一例としては、「みんなで一緒に力を合わせるべき」いう学校文化に浸透している規範があげられます。こうした規範は一見良いことのように思え、また、学校においては必要なことのようにも思えますが、みんなと同じように、同じ方法で、活動することが難しいと感じている子どもにとってはバリアになりえます。それにもかかわらず、その可能性が見過ごされ続けてしまうと、その子にとって学校は安全でない場所になってしまったり、行きたくない場所になってしまったりするでしょう。↘

制度的バリア

2つ目は、制度的バリアです。障害の領域では歴史的に、障害者を学校教育から排除する制度が存在してきました。いわゆる分離教育です。他の子どもと同じように地域の学校に行けず、特別支援学校に行かなければならない。また、そこでのカリキュラムや学習内容は通常学校のものと異なるので、高校入試や大学入試において不利益を被る。そして、高校や大学に行けないことで、人生の選択肢が非常に狭くなってしまう。分離教育は、ただ単に同じ小学校・中学校に行けないというだけでなく、その先の人生を決定づけるような影響を持ってきたのです。その他の制度的バリアとして、特定の職業に関わる免許を障害者には許可しない制度もあげられます。これを欠格条項と言い、障害者の職業選択の自由を制約してきたと批判されてきました。↙

意識上のバリア

4つ目は、意識上のバリアです。これは、障害者に対する偏見や思い込みのことです。 例えば、「障害者はいつも手助けを必要としている」という思い込みを持っている人はまだまだたくさんいます。この思い込みにもとづいて、街で障害者を見かけた時に、「絶対に何か困っているはずだ」と考え、「何かお困りですか？」と善意で声をかけたのに、相手に「特に困っていません」と返されて、自分が困惑してしまうといったことが生じます。みなさんの学校でも、「障害者を見かけたら、手助けをしましょう」というメッセージばかり強調していないでしょうか。しかし、その根底にある「障害者はいつも手助けを必要としている」という思い込みは、障害者を「特殊」な人とみなす考え方を強めることで、障害者の社会参加を難しくするバリアになっている可能性があります。

バリアをめぐる３つの問い

バリアをめぐっては、主に3つの問いが存在してきました。1つ目はバリアはなぜ生じるのか、2つ目はバリアをどう解消するのか、3つ目はバリアは誰が責任を持って解消するのかです。これらの問いに対する回答は、「障害の個人モデル」で考えるか、「障害の社会モデル」で考えるかによって大きく異なります。

個人モデルの考え方

まず、「障害の個人モデル」で考えてみましょう。「個人モデル」は、バリアが生じる原因は、個人の心身機能にあると考えます。したがって、障害者が様々なバリアに直面するのは、その人の足が動かないからだ、目が見えないからだ、耳が聞こえないからだと考えることになります。次に、そうしたバリアをどう解消するのかという問いには、リハビリをして自分の足で歩けるようにするとか、手術をして目が見えるようにするとか、人工内耳をつけて耳が聞こえるようにするなどの方法が出てきます。さらに、誰がバリアを解消するのかという問いには、専門家による医学的あるいは技術的なサポートを受けながら、障害者本人が自分の努力で解消していくことが強調されることになります。障害をめぐっては、こうした考え方が、これまで一般的だったのではないかと思います。

社会モデルの考え方

ところが、「障害の社会モデル」からは、３つの問いに対して、全く違った回答が出されることになります。まず、バリアはなぜ生じるのかという1つ目の問いに対して、「社会モデル」はこう答えます。それは、私たちの社会が障害のない人に合わせて作られてしまっているからだ、と。障害者の心身機能に問題があるのではなく、社会の作られ方の方に問題があるという答えになります。2つ目の、バリアはどう解消するのかという問いに対しては、何らかの社会的な手段で、つまり、障害のある人に合わせて環境を調整したり変更したりすることで解消できる、という答えになります。いまの環境が障害者に合わせて作られていないことが問題なのだから、障害者にも合うようにすればよい、と考えます。
また、3つ目の、バリアは誰が解消するのかという問いに対しても、社会的に作られているものなのだから、基本的には社会の側に解消する責任があるという答えになります。

「思いやり」ではなく「公平な社会」を目指す

ここまでの話を受けて、「社会モデル」の考え方からは、「個人モデル」とは随分違った答えが導き出されることがわかったと思います。その上で、「社会モデル」において最も重要なのは、「バリアはなぜ生じるのか」という1つ目の問いで、それに対し「それは私たちの社会が障害のない人に合わせて作られてしまっているからだ」と考えるところにあります。ここを押さえているかどうかによって、障害者や社会に対する見方が大きく違ってくるからです。
「個人モデル」からは、障害者をかわいそうで、気の毒な人たちと見なし、「思いやりを持って、やさしく見守る社会にしていこう」という考え方しか出てきません。もちろん、ここまで露骨に言っていないとは思いますが、学校で伝えているメッセージもこれに近いのではないでしょうか。これに対して、「社会モデル」からは、「いまの私たちの社会は、障害者を困らせている社会なのだ。障害者に対して、負担を強いてきた社会なのだ。そうした偏った社会をまず反省し、変えていく努力をしよう」という考え方が出てくることになります。
つまり、「社会モデル」が目指しているのは、やさしい社会ではなく、偏りの少ないフェアな社会です。そうした社会を実現していくためにも、まずは学校の中に様々な形で存在しながら見過ごされてきたバリアを見つけ、どのような調整や変更ができるかを考え、教職員自ら主体的に取り組んでいくことが求められています。

“偏った社会から少数派が押し付けられているもの＝バリア（社会的障壁）”

バリアに気づくことは、インクルーシブ社会の第一歩

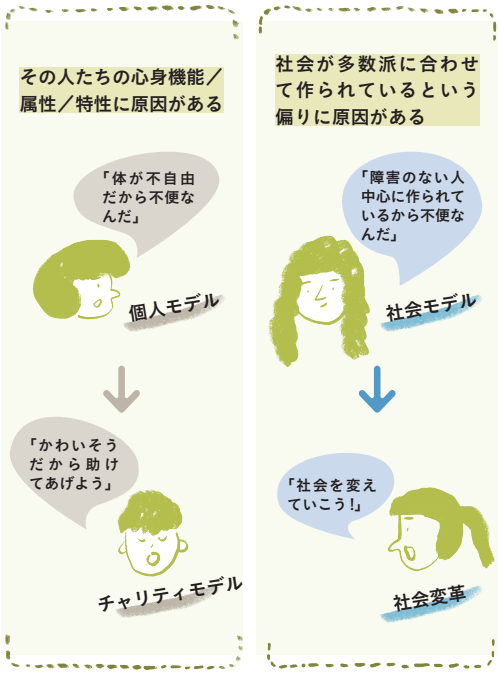
バリアを発見することは、バリアに直面している人にも、その周囲の人にもメリットがあります。バリアに直面している人は、環境にうまく適応できないと「自分のせいだ」と思い込み、自信をなくし、参加を控えてしまいがちです。「学校に行きたくない」「授業に参加したくない」などの気持ちは、誰にでも起こりえます。

一方、環境に適応できている人は、それを「自分の能力や努力の結果」と誤解しがちです。しかし、実際には環境が合っているからスムーズに参加できているだけです。それにもかかわらず「できる」側の人は、できない人を低く評価し、「あの人は努力が足りない」などと考えがちです。それが言葉や態度に表れると、いじめやハラスメントにつながります。

バリアの存在に気づくことができれば、こうした「根拠のない有能感」や「できない人への低評価」を見直すきっかけになります。無意識に他者を厳しく評価していたことに気づき、立ち止まって考え直すことができます。

さらに、バリアを発見することは、状況を改善するために「自分に何ができるか」を考える助けにもなります。複数のバリアに目を向けた上で、「このバリアなら、自分にも解消できるかもしれない」と気づけば、実践につなげやすくなります。こうした変化が積み重なることで、これまで参加しにくかった人の参加機会が増え、排除が縮小していくでしょう。このように、バリアを発見することは、よりインクルーシブな社会の実現につながる重要なプロセスの一部でもあるのです。

少数派がバリアを経験するのはなぜ？





飯野 由里子

東京大学バリアフリー教育開発研究センター
特任教授

東京大学大学院教育学研究科バリアフリー教育開発研究センター 特任教員。専門はフェミニズム、ディスアビリティ研究。一般社団法人ふぇみ・ゼミ＆カフェ（https://femizemi.org/）運営委員。主な著書に『「社会」を扱う新たなモードー「障害の社会モデル」の使い方』（生活書院、2022年；共著）や『ポリティカル・コレクトネスからどこへ』（有斐閣、2022年；共著）などがある。

基礎を理解するために 02

障害の社会モデルとは

―環境が経験をつくる

解説：飯野 由里子（東京大学）

誰がどのように困り、理不尽な思いをするのかは個人の心身機能によって決まるわけではありません。むしろ社会が誰を中心に作られているのかによって決まります。



アキラさん



ヒカルさん

自身は変わっていないのに、環境が変わると立場が逆転

右ページ❷のイラストは、車いすに乗って生活する車いすユーザーが多数派である架空の社会です。そこでは、二足歩行者のアキラさんは少数派であり、車いすバスケに参加できずにしょんぼりしています。車いすユーザーのみんなは楽しそう。なぜアキラさんはバスケに参加できないのでしょうか。

右上の❶のイラストでは現在の私たちが暮らす社会の一面が描かれています。足で歩く人が多数派で車いすに乗って生活する人は少数派です。アキラさんはどこにいるでしょうか？

アキラさんは❷のイラストではしょんぼりしていましたが、❶のイラストではいきいきとバスケを楽しんでいます。対して、車いすに乗っているヒカルさんはしょんぼりしています。アキラさんとヒカルさん自身は変わっていないのに、環境が変わると立場が逆転します。

このイラストからわかるように、誰がどのように困り、理不尽な思いをするのかは個人の心身機能によって決まるわけではありません。むしろ社会が誰を中心に作られているのかによって決まります。この考え方を「障害の社会モデル」といいます。

障害の社会モデルは2006年に採択された国連の障害者権利条約でも採用されており、国際人権法において標準的な考え方になっています。

社会のさまざまな活動に参加できるかどうかは、その人の体や心がどうであるかによって決まるわけではありません。むしろ、社会がどのような人を中心に作られているのかによって決まります。

わたしが こまっているのは わたしのせい…？

いやいや！そんなことないよ。

こまりごとは 環境(かんきょう)が つくるから。ほら。

1



2



イラスト：川崎智子

1と2では いろんな ちがいが あるよ。
どんな 環境(かんきょう)が だれの こまりごとを つくっているかな？

コラム

「包摂」の対象はだれ？

国連教育科学文化機関（ユネスコ）は、世界の教育の状況を概観するグローバル・エデュケーション・モニタリング・レポートを毎年発行しています。その報告書で掲げられるテーマは毎年異なっており、2020年は「インクルージョンと教育：すべての人とは誰一人取り残さないこと」でした。この報告書の主題として教育における包摂性（インクルージョン）が掲げられたことは、世界の教育分野における国際的な関心の高まりを反映したものであったと同時に、ユネスコの課題意識の表れでもありました。教育における包摂性は、今や日本の教育においてもよく耳にするものとなっています。では、我々がこのテーマを聞いて真っ先に思い浮かべる「包摂の対象」とは誰でしょうか。

そもそも、この教育における包摂性という議論自体は、2020年に急に生まれたものではなく、これまで約30年間に渡って取り上げられてきたものです。そのきっかけの一つが、1994年に開催された「特別なニーズ教育に関する世界会議」で採択された、「サラマンカ声明」です。この声明における、「教育において特別なニーズを有する者」とは、「障害児の教育をその議論の中心・根源としながらも、障害児の教育だけではなく、人種や言語、居住環境など、他のあらゆる特別な状況とそれへの対処の必要性を有する児童」（黒田 2002:5;UNESCO 1994）が想定されています。

ここまでで重要なポイントは2点あります。一つ目は、「教育における包摂性」は長い間議論されてきているテーマであるにもかかわらず、日本を含め世界の教育では未だに達成されていないという点です。そして二つ目は、教育における包摂性で想定される者は、障害を有する者に留まらず、教育においてそれぞれの児童が置かれた特別な状況によって、それへの対処を必要としている者であるという、より広い視野に立ったものである点です。

以上をふまえた時、「インクルーシブな学校」とは、どのような学校でしょうか？日本での議論を見ていると、障害児を想定したものが多いような気がします。しかし、昨今のグローバル化によって人の移動がより活発となり、様々な背景を有する児童も学校の一員になってきています。いま日本の学校に通う児童が直面する「バリア」は多様であり、それらを乗り越えるための「インクルーシブな学校」のあり方が問われています。

黒田一雄（2002）「インクルーシブ教育のグローバルガバナンスと特別支援教育－その相克と連携可能性」『アフリカ教育研究』第13巻、3-11頁。
UNESCO. (1994). The Salamanca Statement and Framework for Action on Special Needs Education. UNESCO. https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000098427
UNESCO. (2024). Towards inclusion in education: status, trends and challenges: the UNESCO Salamanca Statement 25 years on. UNESCO.

東京大学バリアフリー教育開発研究センター
リサーチアシスタント　須藤玲

2
学校で実践する

子どもといっしょに取り組む

教材紹介01「バリアはどうしてできちゃうの？」
CASE STUDY　教材「バリアはどうしてできちゃうの？」を使って
2年生に1時間の授業をする
ポイント
Q&A
コラム・インタビュー　補助犬とバリア
コラム　補助犬とバリアの関係ーバリアの
回避と除去の違いに注目する
インタビュー　日本補助犬協会 朴善子さんに聞く
教材紹介02「車いすユーザーの社会」
教材紹介03「迷惑なのはだれ？」

教材紹介 01

スライド　公益財団法人日本補助犬協会・東京大学バリアフリー教育開発研究センターの共同制作教材

バリアはどうしてできちゃうの？

本教材では、補助犬ユーザ（介護犬ユーザ、聴導犬ユーザ、盲導犬ユーザ）が直面する具体的なバリアについて知り、補助犬ユーザをサポートする補助犬の姿を動画で見ることを通して、バリアが社会のさまざまな場面に、いろいろな形で存在していることを学びます。後半では、「重たいドア」の事例を通して、子どもも利用する可能性があるという事実がうっかり忘れられることで、障害のない自分たちもバリアに直面しうることに気づいてもらいます。(→P32参照)

物・情報・ルールが作られる時、誰のことは考えられているけれど、誰のことはうっかり忘れられているのか？

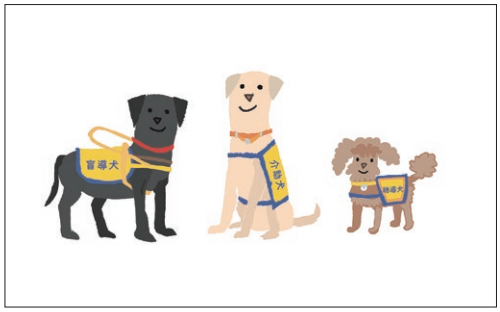
「バリア」(社会的障壁)とは「その人がやりたいことを邪魔しているもの」のことです。バリアと聞くと、車いすユーザが直面する段差や階段を真っ先に思い浮かべると思いますが、こうした「物理的バリア」以外にも、「情報面のバリア」(情報の内容や伝え方によって生じるバリア)や「意識上のバリア」(周りの人々の意識や態度によって生じるバリア)など、目には見えにくいバリアもあります。自分の身の周りにある物・情報・ルールなどに対し、「これが作られる(提供される)時、誰のことは考えられているけれど、誰のことはうっかり忘れられているのか？」という意識を向けるようにすると、バリアを発見しやすくなり、インクルーシブな学級・学校づくりにつながります。

なお、社会モデルは「バリアの発見装置」と言われます。この点をふまえると、バリアの存在に意識的になっておくことは、社会モデルを理解する時の助けになります。したがって、「車いすユーザの社会」の授業(対象学年は小学4～6年生)を実施する前に、本教材を使った授業を行っておくとよいでしょう。対象学年は小学2～4年生ですが、前半と後半を分け、小学2年生時に前半部分を、3年生時に後半部分を実施するなどしてもよいでしょう。

教材の使い方

STEP 1

補助犬は補助犬ユーザーが日常生活で経験するさまざまなバリアに対応するために特別に訓練された犬です。補助犬は3種類がいます。



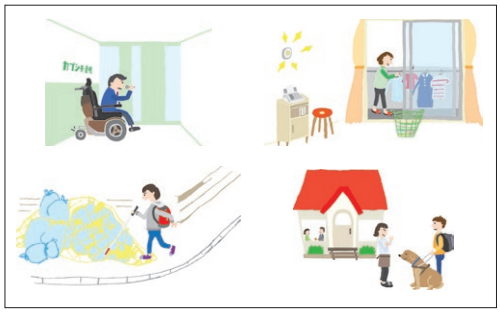
STEP 2

補助犬ユーザーはどんなバリアを経験しているでしょうか。話を聞いてみましょう。



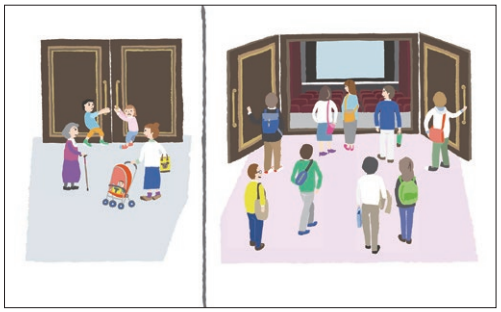
STEP 3

重たいドア、音でしか来客を知らせてくれないインターフォン、歩道に積み上げられたごみ、お店の対応、みなさんにとってもバリアになっているものはありますか？



STEP 4

バリアはどうしてできるのでしょうか。ドアを作った人が誰かにイジワルをしようとしているわけではありません。このドアは、誰のことを忘れているのでしょう？



CASE STUDY 教材「バリアはどうしてできちゃうの？」を使って、２年生に１時間の授業をする

吹田市立高野台小学校

子どもが身の回りのバリアを探していけるように、子どもの目線に立った具体的なシチュエーションを示す

ゴール

２年生にはなじみのない「バリア」ということばを自分のことばにする。

クラスの状況

「バリア」も「バリアフリー」という言葉も知らない。子どもが思う「バリア」という言葉の意味は、おにごっこのときのバリア。

懸念点

「バリア」と「バリアフリー」ということばを２年生に１時間の授業で自分のことばとして使えるまでに落とせるだろうか。

使用した教材

「バリアはどうしてできちゃうの？」
補助犬ユーザをサポートする補助犬の姿を動画で見ることを通して、バリアが社会のさまざまな場面に、いろいろな形で存在していることを学ぶ教材。→ P32 参照

授業の工夫

子どもたち自身の主体的・対話的なプロセスを用意する。

しかけ１

ペットの犬と補助犬は違うことを意識させる

導入の「バリア」や「バリアフリー」という言葉とその説明は文字だけだと難しい。人と犬が駅のホームを歩く写真を見せ、「何をしているところかな？」と問いかけることで、通常の散歩とは違うことに気づかせるところから始めた。

しかけ２

新しい言葉を可視化して何度も確認できるようにする

「バリア」と「バリアフリー」のことばを整理して書くプリントをはじめに配って書かせることで、ことばの意味がいつでも手元で見られる状態で授業を進行した。

しかけ３

子どもたち自身ももっている違いを意識させる

先生と比べるとみんなは背が小さいよね、と背の高さの違いを例に、背が小さいことで経験するバリアを探した。「自分たちは自由に好きなことができているから関係ないや」と思うのではなく、自分の生活の中でバリアを考えられるようにした。

しかけ４

擬人化した対象に手紙を書くことで、物事を批判的な視点から捉え、対話的に表現させる

「りっぱなドアさん」にお手紙を書くという形で、ごっこ遊びをしながら考える場面にした。手紙を書くという活動は、口頭の場合だと「おまえあかんやろ」と批判合戦になるなどの懸念があるのに比べて、考えて文字にすることになるため、子どもが落ち着いて取り組める。お手紙を書くという活動は国語科でもたびたび行う活動なので子どもたちも慣れており取り組みやすい。

検討したこと

授業まえ

どこで分けるか？
教材の分量が多いため前半と後半に分けて２時間の構成にしてもよいと指導案に書かれていたが、「補助犬ユーザー」のところで終わってしまうと、難しかったで終わってしまうかもしれないと考え、「りっぱなドア」のところも入れたかった。

言葉で説明して、それを耳できくだけでは伝わらないかもしれない。

子どもがどう理解したか、伝わったか確認するために、補助犬について勉強する前と後で「何がバリアになっているかな？」と問いかける。

声の大きい子の言葉に引きずられず、それぞれが落ち着いて自分の考えを整理するにはどうしたらいいか。

授業あと

後半に重点を置くために
３つの補助犬ユーザーのバリアとして３種類を紹介したが、後半に重点を置くために１つ（例えば、後半のドアの話に繋がる介助犬ユーザーの事例）を扱い、子どもの様子を見てもう一つ紹介するかを判断してもよいかもしれない。

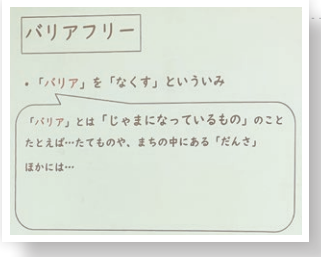
授業あと

習慣上のバリアへの理解
もっと後半に時間を割きたかった。物理的・情報面のバリアの理解にたどりつくことはできるが、習慣上のバリアのところまでは難しかった。

学習指導案・学習指導過程

学習活動と内容	教員の発問等の行為および留意点	生徒の活動
導入	○補助犬とはどのような犬かを理解する ・補助犬と人が駅のホームを歩いている写真を見せ、何をしているか考える ・補助犬とペットは異なる役割を担うことを意識	先生の視点：補助犬を一般的なペットの犬と混同しないように、違いに目をむけてほしかった。
1 バリア（フリー）の概念理解	○「バリア（フリー）」という言葉を聞いたことがあるか、知っているか尋ね、定義を確認する 「バリア」は「じゃまになっているもの」「困りごとの原因」で、「バリアフリー」はそれを取り除くという意味です。 本授業における根幹となる概念なので、丁寧に（必要に応じて繰り返し）確認する	○バリアとその除去について想起・応答 ○理解の定着・確認のために、「バリア」についてワークシート記入
2 3 4 補助犬ユーザーのバリアの理解と補助犬の役割の確認	○ドア、インターフォン、ごみの事例を順に提示し、それによって困る人はどういう人か尋ねる ○困る人の例として肢体不自由の人、聴覚障害者、視覚障害者を提示。 ○介助犬・聴導犬・盲導犬およびユーザーの動画を視聴させ、どのようなバリアにどのように対応しているのか説明する 	○環境の側にある原因によって困る人がどのような人か想像・指摘する 先生の視点：「バリア」という新しいことばを自分のことばにしてもらうために、ワークシートに自分のことばで記し、それをいつでも見返せるように子どもの手元に残して授業を進めたかった。
5 補助犬ユーザーに共通する習慣上のバリアの理解	○補助犬ユーザーが回避し得ない共通のバリアがあることをこどもに考えさせる バリアは補助犬ユーザーの側にではなく環境の側にあるんですね。法律を知らないで習慣的に犬の入店を断ってしまうこともバリアになるんですね。 	○ノートを見返し、バリアの定義を想起・応答する 先生の視点：「何がバリアになっているかな？」という問いを、補助犬について勉強する前後で2回問いかけることで、わかったり気づいたことを意識してほしかった。
6 7 社会モデルで物事を捉える	子どもにとってのバリアを考えるため「りっぱなドア」事例について説明し、何が問題なのか確認する ○「問題の原因はこどもの側にある」とは別の見方として、そもそものドアの構造・素材に問題の原因があることを、先の事例を踏まえて突き止めさせる ○「りっぱなドア」がだれの利用を念頭におき、だれを念頭においていないのか、確認する 	○りっぱなドアさんにお手紙を書き、ドアが気づいていない視点を指摘する ○だれが困っているかをふまえつつ、困らせている周りの環境があることを見出す 先生の視点：意見を言うだけだと批判合戦の大喜利になってしまうことが懸念されるので、手紙を書くという落ち着いた課題にしてじっくり考えてほしかった。
8 まとめ	○身の回りにあるバリアについて再例示する ・バリアの原因を困っている人の側に求めるのではなく、その人の周りの環境の側に求める見方があることを確認・強調する	









グラフィック指導案

教材「バリアはどうしてできちゃうの？」の指導案には、授業の進行過程を図で示した“グラフィック指導案”が添付されています。

確認する。

バリア（フリー）の概念理解
1 バリアを確認する

補助犬ユーザーのバリアの理解と補助犬の役割の確認
2 点字ブロック上のゴミ
3 手の届きづらい把っ手
4 聞こえないインターフォン

補助犬で回避できるバリア
物理的・情報面のバリア

補助犬ユーザーに共通する習慣上のバリアの理解
5 習慣上のバリアを知る：入店

補助犬だけでは回避しにくいバリア
習慣上のバリア

考える。

社会モデルで物事を捉える
6 子どもにとってのバリアとそのバリアの発生メカニズムを考える
7

子どもにとっての物理的・情報面のバリア

例
・りっぱなドア
・学校の掲示で難しい漢字が使われている



子どもにとっての習慣上のバリア

例
・体育の時は短パン着用というルールがある
・シャーペンの利用が禁止されている
・休み時間は外で元気に遊ぶという風習／慣習がある

学ぶ。

まとめ 8 最終的なバリアの解消にはさまざまな環境の変革が必要

進行のヒント

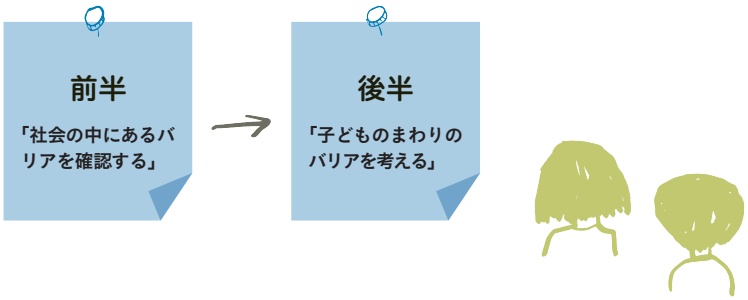
- 後半のパートで、物理的バリアだけに話が終始せず、習慣上のバリアにも目を向けるよう意識してください。
- 習慣上のバリアのオリジナル事例を最終的に扱うことができるとよいでしょう。（子どもからあげられる意見がヒントになります）

→ **習慣上のバリアの例：体育の時は短パン着用というルール**

ポイント

物理的バリアに終始せず、習慣上のバリアに目を向ける。

1 この授業は、前半で「補助犬ユーザーが経験するバリア」を通して、社会の中にあるバリア（物理的バリアや情報面のバリア、そして習慣上のバリア）を確認し、後半では子どもたち自身が経験しているバリアについて考えます。そして、授業の核心はバリアがどうしてできてしまうのか、そのメカニズムに理解を深めていくことにあります。



2 一見、後半のバリアの発生メカニズムを理解するのが難しそうに思えるのですが、P15で紹介したように小学校2年生を対象に行った実践でも、子どもたちはバリアとは何で、バリアがなぜ発生するのか、そのメカニズムをしっかりと理解していました。
この教材で、実際に難しいのは、バリアを目に見えやすい物理的バリアや情報面のバリアと捉えてしまうことで、習慣上のバリアまで目を向けることができないというところにあります。グラッフィック指導案で示した、茶色の部分です。

3 習慣上のバリアは、われわれの日常生活の中に、当たり前のこととして埋め込まれているので、それをあらためてバリアとして認識することが困難です。
バリアは少数派に押し付けられているものですので、少数派の声に耳を傾けなければ、バリアは見えません。
大人の社会の中に生きる子どもを少数派としてとらえ、子どもの意見を引き出すことができれば、子どもが経験する習慣上のバリアを知ることができるでしょう。学校の身近な活動に目を向けて子どもたちと話をしてみてください。

4 バリアは物理的なバリアや情報面のバリアのように目に見えるものばかりではないこと（バリア理解）、そして、社会の仕組みや環境を作るとき、少数派のことを想定しないことによってバリアが生み出されてしまうこと（バリアの発生メカニズム）を子どもたちに伝えることができたなら、子どもと社会モデルを考える授業ができたと考えてよいでしょう。

子どもにとっての物理的・情報面のバリア

目にみえやすく、子どもたちはそのメカニズムを理解できる。

子どもにとっての習慣上のバリア

当たり前のこととして日常生活にあるので認識が困難。少数派に耳を傾けることが重要。

チェック項目

- ✓ バリアはじゃまになっているもののこと。
- ✓ バリアにはいろいろなものがあり、ルールや習慣もバリアになる。
- ✓ 少数派のことを考えずに社会を作ると、バリアができる。

Q&A

ここでは、実際に先生から寄せられた疑問も交え、本教材の使い方について提案をしています。

授業の前半（グラフィック指導案1 2 3 4）と後半（5 6 7）との接続がうまくいきません。どうしたらよいですか？

補助犬の役割について、事前学習を行う

補助犬について見聞きしたり知っていたりすることが少なく、その点で新規性の高いテーマである場合には、補助犬の役割それ自体が子どもたちにとって負荷の大きな学習事項となってしまう可能性があります。その場合、子どもたちの思考を促したい後半の事例学習で子どもたちが疲れてしまったり、時間が十分に取れなかったりということがあり得ます。補助犬のデモンストレーションや事前学習を行うことで、子どもたちがすでにイメージを持っている事項について簡単に「復習」することができ、よりスムーズに後半につなげられるようになるでしょう。

後半で独自の例を用いる

補助犬の事例で扱われるものと同じバリア（重厚なドアや点滅しないインターフォン）を後半でも用いることによって、子どもたちの思考が前半での学習事項に強く拘束されてしまうということがあるようです。独自の事例を用意することで、未知のバリアについて、社会モデルの観点から、子どもたちが考えをめぐらせるようになるかもしれません。

授業のふりかえりで「一人一人に障害がある」という意見が散見されました。どうしたらよいでしょうか？

あらためて社会モデルの考えを子どもたちと共有し、真意を確認する

一見したところ、子どもがまだ個人モデルを相対化できていないようですが、社会モデルの考え方にしたがえば、バリアとは、ある特定の状況・環境によって人々が被る障壁のことです。そのため、誰もが場合によってはバリアを経験することになるわけです。もしかしたら、子どもがそのことをうまく表現できていないだけかもしれません。まずは、「社会モデル」という言葉を使わずとも、その意味・意義について子どもたちと丁寧に共有してみましょう。その上で子どもたちに真意を確認できる機会があると、名実ともに学びが成立する道が見えてきます。



Example

◉吹田市立千里第三小学校の例

インクルーシブな学校づくり推進校である吹田市立千里第三小学校では、今年度、公益財団法人日本補助犬協会の協力のもと、補助犬が学校を訪問しました。このバリアの授業を実施する予定だった3年生、そして4年生に、出前授業として補助犬ユーザーが経験するバリアと、それを補助する補助犬のデモンストレーションを行いました。
数日後に行われた3年生の授業では、この出前授業が事前学習となり、子どもたちは補助犬についてよく知った上で、バリアについて考えることができました。







補助犬とバリア

コラム



補助犬とバリアの関係
―バリアの回避と除去の違いに注目する

補助犬ユーザーは日々の生活において、さまざまバリア（障壁）を経験しています。それらバリアを、社会モデルの考え方にそって説明すると、「特定の人しか想定していなかったことによって、そこで想定されていなかった人たちが被ってしまう障壁」だといえます。

そうした障壁を前にして、補助犬は、そのユーザーを助けてくれます。介助犬であれば扉の開閉を手助けしてくれますし、盲導犬であれば点字ブロック上の障害物を避けてくれます。聴導犬は、音が聞こえることを教えてくれます。

ここで考えたいのは、補助犬はバリアフリー、すなわち障壁の除去・解消に貢献しているか、ということです。補助犬はなるほど、たしかにさまざまな障壁を回避することの役には立ってくれます。「補助犬　assistance dog / service dog」とは、その言葉の定義からして、いわばゴールを決めようとするユーザーのアシスト（補助）、サービス（奉仕）をしてくれる存在です。したがって補助犬は、障壁を回避する、もっと言えば、障壁の除去すらも回避してしまうのです。社会に現に埋め込まれている障壁を、補助犬は好むと好まざるとにかかわらず、温存してしまうのです。

社会モデルでは、バリアは物理的な障壁、制度的な障壁、文化情報面での障壁、意識上の障壁の４つの現れ方をします。補助犬は主に、物理的な障壁を回避してくれますが、この教材では、補助犬を携えたユーザーの入店を許否するお店の存在がクローズアップされます。これは物理的な障壁ではなく、お店の人の意識上の障壁、あるいは補助犬の入店を拒否してはいけないという法律の周知が十分になされていないという点で、文化情報面での障壁であるともいえます。

本教材は、補助犬がユーザーにとって役に立つ存在であるということを教えてくれる一方で、社会モデルの考え方に立ったときには限界を抱えてもいる、ということを示唆しています。「大きなドア」や「インターフォン」といった子どもたちの視点から見た障壁は、作り変える必要があるはずです。より身近な、物理的な障壁に限らない事例の提示など、教材を使う（作り変える）先生方の創意工夫によって、子どもたちが以上のようなことに気がつけると、教材の真価がより発揮されるのではないかと考えられます。

東京大学バリアフリー教育開発研究センター
特任研究員　日隈脩一郎

—日本補助犬協会 朴善子さんに聞く—

このハンドブックで紹介している教材「バリアはどうしてできちゃうの？」は、公益財団法人日本補助犬協会と東京大学バリアフリー教育開発研究センターが共同で制作しました。補助犬についてよく知らないという先生もたくさんおられるので、今回は代表の朴善子さんに、補助犬事情や補助犬とともに暮らすことで見える社会の中のバリアについてお話を伺いました。



朴 善子 ぱく よしこ

公益財団法人日本補助犬協会　代表理事

2002年身体障害者補助犬法施行を機に、3種類の補助犬を育成・認定する日本補助犬協会を設立。自立を目指す若者が放棄犬を聴導犬に育てる「あすなろ学校（2008～2012）」を開設。3種類の補助犬（盲導犬・介助犬・聴導犬）訓練士及び指導員、補助犬ガイド士。パピーファミリーの経験からこの分野での仕事を志した。

補助犬の受け入れ拒否は、なぜなくならないの？

日本には、補助犬の受け入れを義務づける法律※1があります。しかし、お店や病院で補助犬の入店を拒否されることがいまだに多いと聞きます。2024年3月に公開された調査※2では、この1年間で「受け入れ拒否にあった」と回答した補助犬ユーザーが103人に上り、全体の44%にのぼったそうです。
法律があるのに、なぜ補助犬の受け入れ拒否はなくならないのでしょうか？

補助犬の受け入れ拒否について教えてください。

朴さん：法律が施行されて20年以上が経ちますが、社会の理解が十分に進んでいないことが大きな要因です。たとえば、補助犬と一緒に暮らしている方が「補助犬がいると行けない場所がある」となると、どうなるでしょうか？
毎日の買い物、友人との外食、体調が悪くなったときの病院…。当たり前にできるはずのことが、補助犬ユーザーには制限されてしまいます。これは、「子どもがいるなら買い物はできません。子どもは外で待っていてください」と言われるのと同じです。

※1　身体障害者補助犬法（2003年施行）
※2　日本盲導犬協会、調査報告書（2024年3月公開）

ある盲導犬ユーザーの方が、補助犬と一緒にいつも利用していたスーパーにある日突然入れなくなったという話があります。理由を尋ねると、店長が変わり、「犬の嫌いなお客さま、アレルギーのあるお客さまがいるので申し訳ありません。本当は受け入れたいのですがすみません。」と断られたそうです。とても丁寧な対応に聞こえますが、実質的には「あなたは入店できません」ということです。こうして、補助犬とともに暮らす人々が行動の自由を奪われてしまうのです。

法律があるのに受け入れ拒否が続くのはなぜ？

朴さん：日本では、ペットとして犬を飼う人は多いものの、公共の場での受け入れは厳しく制限されています。飲食店や商業施設では「犬は入店不可」が当たり前になっており、そのため店員も犬を見かけると反射的に入店を断ることに違和感を持ちません。
一方で、欧米では犬の社会的な受け入れが広く進んでいます。例えば、ヨーロッパの多くの国では、犬が電車やバスなどの公共交通機関に乗ることができ、カフェやレストランでも一緒に過ごせることが一般的です。そのため、犬が人とともに公共の場にいることに対する抵抗感が少なく、補助犬と一般の犬の違いについての理解も広がっています。

補助犬とバリア

インタビュー



写真提供：公益財団法人日本補助犬協会



ほじょ犬マーク

公共の施設や交通機関はもちろん、デパートやスーパー、ホテル、レストランなどの民間施設は、身体障害のある人が身体障害者補助犬を同伴するのを受け入れる義務があります。

他方、日本では「犬＝公共の場に入れないもの」という意識がいまだ根強く、その延長線上で補助犬も一般の犬と混同されがちです。このため、法律があるにもかかわらず習慣的に受け入れが拒否されてしまうことが多いのです。

日本の補助犬の数は、海外と比べて少ないのでしょうか？

朴さん：はい。日本で働く補助犬は2024年10月時点で906頭（盲導犬796頭、介助犬60頭、聴導犬50頭）です。一方、アメリカでは1万7000頭が活躍しています。人口差を考慮しても、日本は補助犬の数が圧倒的に少ないといえます。補助犬は、ユーザーと出会ってから一緒に訓練を受け、認定を経て社会で生活します。しかし、社会の理解が十分でないために入店拒否を受けることも多く、補助犬ユーザーになること自体がハードルになっているのです。

日本と海外の補助犬事情の違い

欧米では犬の社会的な受け入れが広く進んでいるということですが、具体的にはどのように日本と違っているのでしょうか。

朴さん：みなさんがトイレに行くように、補助犬もトイレが必要です。では、どこで、どのように補助犬はトイレをしているのでしょうか？犬は土や芝生があればその場で用を足せますが、街中に土や芝生がない場合はどうするのか。犬のトイレについて見てみると犬に対する考え方が見えてきます。



写真提供：公益財団法人日本補助犬協会

ヨーロッパ（パリ）

パリでは、犬の糞尿が社会問題となり、犬専用のトイレが街中に設置されました。街全体で犬と人が共に過ごす文化があり、犬と一緒に買い物やカフェに行くことが一般的です。

ハワイ

ハワイには街中にドッグランがあり、犬が自由に遊べると同時に、トイレを済ませることができます。緑が多い環境では、必ずしも専用トイレを設ける必要がないことがわかります。

日本

一方、日本ではコンクリートが多く、補助犬はペットシーツの上で排泄する訓練やワンツーベルトという専用のベルトで袋をお尻につけて排泄する訓練を受けています。また、清潔を重視する文化から、毛が落ちないよう補助犬に服を着せることもあります。こうした対応は、海外からは「犬が自然らしく暮らせていない」とネガティブに捉えられることもあります。

補助犬トイレに見るお国柄の違いを教えてください。

朴さん：4年に1度のオリンピック・パラリンピックなどのスポーツ大会では、補助犬トイレにその国の特色が現れます。初めてオリンピック、パラリンピックで補助犬のトイレを設置したのがロンドン大会です。

2012年　ロンドン大会（イギリス）

補助犬トイレは木の壁で仕切られ、ウッドチップが敷き詰められていました。犬が安心してトイレをできるよう配慮されており、犬に優しい設計が特徴的でした。

2016年　リオ大会（ブラジル）

ドッグラン形式のトイレが設けられ、補助犬が自由に走り回れるスペースが用意されていました。スタジアムには補助犬ユーザー専用席があり、ピクトグラムで分かりやすく表示されていました。

2016年　岩手国体（日本）

岩手国体では、ブルーシートの上にペットシーツを敷いて使用する方式が採用されていました。清潔であることを重視する日本の文化が表れています。でも、これでは車椅子ユーザーがゴミ箱まで行けずに使えないという課題がありました。

2020年　東京大会（日本）

限られた条件の中ではありますが補助犬ユーザー当事者の声が届けられ、改良が重ねられました。目隠しの設置や段差の解消、緑のマットを敷くなどの工夫が施され、補助犬ユーザーがより利用しやすい環境が整備されました。



写真提供：公益財団法人日本補助犬協会

社会の中のバリアを考える

補助犬トイレを見てみると、その社会で犬がどのように捉えられ、どれだけ社会に参加できているかがわかります。補助犬は人間と共に生きています。だからこそ、トイレのような配慮が必要になります。

しかし、もし犬が犬にとってやさしい環境で暮らしていたならば、トイレの設置は必要ありません。補助犬のトイレが必要になるのは、人の都合に合わせて作られた社会に犬が暮らすからです。

街中で補助犬用のトイレを見かけたら、「この社会にはどんなバリアがあるのか？」と考えてみてください。それは、犬と人間が共に生きる工夫を見つけるヒントになるかもしれません。

公益財団法人日本補助犬協会

3種類（盲導犬・介助犬・聴導犬）の補助犬を育成・認定できる団体。補助犬のことを多くの人に知ってもらうために「もっと知って補助犬キャンペーン」や、企業・団体等への補助犬受け入れセミナーの実施など、補助犬を知ってもらうための活動を積極的に行っています。

日本補助犬協会さんおすすめの補助犬について知るためのリソース

もっと知りたい！人を助ける「補助犬ほじょけん」の基礎きそ知識
広報東京都こども版 2024年11月

補助犬に関する基礎知識を子どもたちむけに紹介したページです。

iOSアプリ
「もっと知ってほじょ犬クイズ」

クイズを通して補助犬に関する知識を深めることができるアプリです。

教材紹介 02

紙しばい

車いすユーザーの社会

本教材では、車いすユーザが多数派、二本足で立って歩く人が少数派という架空の社会を描いた紙しばいを通して「社会モデル」の要点を学びます。子どもたちの多くは架空の社会では少数派の立場に立たされることになります。少数派だからという理由で、さまざまな不利が生じることを共感を持って経験することで、少数派に対する不利を生み出す社会の仕組み（多数派の都合に合わせて社会の環境が作られてしまうこと）に気づけるようになっています。（→P32参照）

「障害者が経験する困りごと」の理解に留まらず、「困りごと」を生じさせている社会の偏りに目を向ける

私たちの日常生活において、障害とは、個人の心身機能に関する制約・欠陥（＝インペアメント）として理解されがちです。「個人モデル」と呼ばれるこうした障害の理解の仕方は、障害者の心身に主要な（時に過剰な）関心を向け、それを「問題のあるもの」「望ましくないもの」とみなしがちです。また、個人モデルは障害のある人を、その心身機能の違いゆえに障害のない人とはまったく異なる特殊な存在として他者化する一方で、障害のない人に対して特権を与えるよう機能してもきました。つまり、個人モデルにもとづく実践は、障害のある集団と障害のない集団という区分を作り出し、障害のない集団に、より大きな力を配分する社会の仕組みを生み出してきました。

社会モデルは、こうした社会の仕組みを問題化するために登場した考え方です。社会モデルでは障害を「活動上の制約」「不利」「不利益」（＝ディスアビリティ）と読み換えた上で、ディスアビリティを発生させる社会的な仕組みに主要な関心を向けます。本教材は、社会モデルのこうした考え方を子どもたちと一緒に考えるため、「障害者が経験する困りごと」の理解に留まることなく、そうした「困りごと」を生じさせている社会の偏りに目を向けてほしいという思いから開発されました。

教材の使い方

STEP 1

多くの人が車いすに乗る街に暮らす二足歩行者のアキラさん。自分以外はみんな車いすに乗っています。



STEP 2

アキラさんは街の中でさまざまなバリアを経験します。



STEP 3

二足歩行者の困った状況をなんとかしようと車いすユーザーのえらい人たちは話し合いをしますが、出てきたのはヘンテコな政策ばかりです。



STEP 4

「車いすユーザーの社会」のお話を受けて、みんなで話し合ってみましょう！

アキラさんが住む社会は誰もが過ごしやすい社会になっていますか？

アキラさんが過ごしにくくなっているのは、アキラさんのせいですか？

誰もが過ごしやすい社会・学校にするために大切なこととはなんでしょう？



教材紹介 03

映像

迷惑なのはだれ？

電車の優先席をめぐるトラブルを通して、多様性への理解を深めるための教材です。東京大学バリアフリー教育開発研究センターの教材をもとにNHKが制作した番組を見せながら、見た目ではわからない他者の事情について子どもと一緒に考えることができます。（→P32参照）

相手の事情が見えない状況下の衝突場面を通して、「相手の事情を想像する」態度を醸成する

私たちの間には、さまざまな違いが、時に目には見えにくい形で存在しています。したがって、他者と同じ時間や空間を共に過ごすためには、相手が自分に合わせてくれることを当然視するのではなく、相手と自分とは異なる存在だという認識から出発し、相手が置かれている事情を知ろうとする態度が求められます。実際の生活の中では、互いの異なる事情を、話し合いなどを通して確認し合えるケースもあります。しかし、不特定多数の人が一時的に居合わせるような場では、そうした確認は困難でしょう。このため、少ない情報の中から、相手が置かれている事情を想像するしかありませんが、とりわけ目に見えにくい違いによって何らかの事情が生じている場合、想像すること自体が難しいこともあるでしょう。

本教材は、はたからは相手の事情が見えにくい状況下で生じている衝突場面を通して、「相手の事情を想像する」という、自分と異なる他者と共生するにあたって大切となる態度を醸成するためのものです。相手の事情を気にかけることで、自分が相手に下している不公平な評価を修正したり、誤解にもとづく摩擦や衝突を避けたりすることができるという気づきを促すために開発されました。

教材の使い方

STEP 1

ある電車の優先席に3人の人物（おばあさん、おじさん、おねえさん）が座っていて、3人の前にはおにいさんが立っていました。



STEP 2

歩くのが大変そうなおじいさんが電車に乗ってきました。それを見たおじさんが、席を譲ろうとして席を立ちました。



STEP 3

そのとき、前に立っていたおにいさんが優先席に座り、席を譲ろうとしたおじさんは、怒ってお兄さんを怒鳴りつけてしまいます。



STEP 4

さて、このおじさんとおにいさんとおねえさんのうち、誰が一番わるいでしょうか？
みんなの意見を出し合おう！

**意見を出し合ったあと、3人（おじさん・おにいさん・おねえさん）に「心の電話」をかけ、それぞれの事情を聞きます。
子どもたちの意見はどう変わっていくでしょうか。**



コラム

支援の原理―社会モデルから考える

これまで、「社会モデルはどのように学校に導入できるのか」を主題に、先生方にインタビュー調査や実践観察を引き受けていただいた。ここで、社会モデルから考えるというのは、①子どもが受けている不利益や制約に目を向け、②その要因を社会の仕組みに見出し、③既存のルールやシステムをつくり変えていくこととする。先生方は、子どもたちが豊かに学べる環境をつくるために、様々に社会モデルを活用されていた。

A先生は、書字の苦手な子に、手書きの選択肢しかなければ「エネルギーが削がれ」「明日学校来られないし、しんどくなる」として、既存のルールを子どもの成長を妨げる障壁として捉えていた。

こうした子どもごとへの異なる処遇が、時には不公平感と結びつくことについて、B先生は、社会モデルを通して「困った人は助けないとダメでしょみたいな、押し付けがましい道徳ではなく」「子供に筋が通った説明ができるかな」と話す。

また、身体の特性のために、学校内での移動が制限される子について、C先生は「いろんな人にぴったりの環境で最初から作られていたら、もっと自由にのびのびできていただろうに」と話す。

先生方は、支援を子ども個人のための特別な処遇ではなく、社会的な障壁を取り除く大人側の責務として捉えていた。社会モデルは支援の方法というよりも、支援の原理として、先生たちの様ざまな実践と結びついていた。

また、①②③の過程をたどる中で、先生たちは支援の意味を様々に問い直していた―不利益を特定するとき、子どもの気持ちは置き去りではなかったか(①)、要因の特定は適切だったか(②)、変更するうえでの限界は何だったのか(③)。

D先生は、社会モデルから考えるということは、「1日でできることじゃないけど、じゃあそれを諦めていいわけではないみたいな。たぶん難しかったり、上手くいかなかったりとかジレンマがあったりとか、意見が衝突したりとか」「でもそっちの方向に向かったほうが絶対いいよね、みたいなことじゃないか」と話す。

社会モデルは、再帰的で共同的で長期的なプロセスを要求する。同時に、学校から社会を変える力を持っているのではないかと思う。

東京大学バリアフリー教育開発研究センター
リサーチアシスタント　別府崇善

3

課題を見つける

自分の足元を点検する

01　インクルージョンの指針を活用する
　　ーインクルーシブな学校づくりの歩み
02　教員が自分の学校を点検してみる
　　ー研究推進校の取り組み

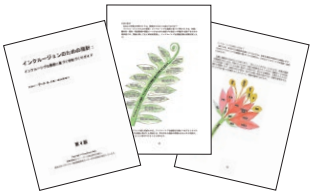
課題を見つけるために 01

インクルージョンの指針を活用する

―インクルーシブな学校づくりの歩み

『インクルージョンの指針』日本語版

『インクルージョンの指針』は、教職員が主体的に、学校のあらゆる場面をインクルージョンの観点から見直し、改善することをサポートするガイドブックです。イギリスで最初に出版されたのは2000年。最新版である第4版は「インクルーシブな価値に基づく学校づくりガイド」という副題で、2016年に出版され、東京大学バリアフリー教育開発研究センターによって日本語に翻訳されました。このガイドブックでは、「インクルーシブな文化をつくる」「インクルーシブな方針を生み出す」「インクルーシブな実践を展開する」という3つの観点に則した70の指標と2000の設問を通して、学校の現状をチェックすることができます。



インクルージョンの指針：吹田市版

2022年度（令和4年度）インクルーシブ教育研究会「インクルーシブな学校づくり」プロジェクトのメンバーが、以下の観点で『インクルージョンの指針』から選定したものです。具体的な項目は、「インクルーシブな学校づくりハンドブック2023」のP31をご覧ください。

［選定の基準］
- まずは大人が変わる必要があるので主語が大人の項目を選ぶ
- 学校の中でメンバーが考えるきっかけになるものを選ぶ
- 学校の中のメンバーの負担になり過ぎないようにする

「インクルーシブな学校づくり研究会・研究推進校」

『インクルージョンの指針』は、教職員が主体的に、学校のあらゆる場面をインクルージョンの観点から見直し、改善することをサポートするガイドブックです。
吹田市と東京大学教育学研究科の連携協定のもと、この『インクルージョンの指針』を使った取り組みが進んできました。

「インクルーシブな学校づくり研究会」の取り組み（2024年度）

「インクルーシブな学校づくり研究会」は4年目となり、12名のメンバーが集まりました。メンバーの3分の2は2年以上継続して活動しています。研究会では、メンバーそれぞれが「子どもと社会モデルを考える授業」を中心に、「合理的配慮と環境の整備によるバリアのない学校づくり」や「学校の包摂性向上に向けたインクルージョンの指針の活用」といったテーマをもって1年間活動しました。今年度は、子どもの権利に焦点を当てて学習を進めていく中で、メンバーからの提案により学校行事が子どもたちにとってのバリアになっていないかについて意見交換を行いました。

「インクルーシブな学校づくり研究推進校」の取り組み（2024年度）

吹田市立教育センターのインクルーシブ教育研究推進校事業3年目を迎え、研究推進校には2022年度から継続して高野台小学校、新規で千里第三小学校の2校が参加しました。高野台小学校は1学年1・2クラスの小規模校ですが、千里第三小学校は1学年5・6クラスある大規模校です。学校内の人権委員会メンバー4名が中心となって、学校内でのインクルージョンの指針の活用や子どもと社会モデルを考える授業実践・補助犬の来校といった取り組みが進められました。

〈これまでの経緯〉

2022年　インクルーシブな学校づくり研究会メンバーが吹田市版を作成
2023年　研究会メンバーの所属小学校で吹田市版を使ってアンケート調査
2024年　インクルーシブな学校づくり研究会とインクルーシブな学校づくり推進校（吹田市立千里第三小学校・吹田市立高野台小学校）で活動を展開
研究会……毎月の意見交換を実施（→P29参照）
研究推進校……各学校の課題を洗い出すためのリストを作成・校内メンバー全員でディスカッション（→P30, 31参照）

インクルーシブな学校づくり研究会で意見交換を行ったテーマ(2024年度は社会モデルに関連する項目を選定)

7月 建物

・建物をアクセスしやすく作る時、身体的な障害のある人だけでなく、ろう者や難聴者、全盲や弱視の人、幼い子どものいる親（二人乗りベビーカーを含む)、お年寄りなど、すべての人のニーズが考慮されていますか？【B1/10/f)】

・大人や子どもが生理の際に対処するための、ゆとりがあって清潔で安全な場所はありますか？【A2/9/q)】

・過剰なプレッシャーを感じたとき、子どもや大人が落ち着ける場所、もしくは必要な場合に話せる相手がいる場所がありますか？【A2/10/f)】

8月 掲示物や展示物の包摂性

・学校の入り口の掲示物や展示物には、学校と地域コミュニティのメンバーすべてが反映されていますか？【A1/1/o)】

・掲示物や展示物では、専門用語や使い古された言い回しを使わないようにしていますか？【A1/1/r)】

・現在の学校にはいないタイプの出自やアイデンティティの人々も歓迎していることが、書類、掲示物、展示物を通して伝わっていますか？【A1/1/k)】

9月 ジェンダー役割／性別二元論

・自分のことを男性か女性のどちらかだと考えている人だけではないと、大人や子どもは認識していますか？【A1/9/a)】

・大人は、性役割についての固定観念を自分がどれだけ持っていて、そうした態度を見せることが子どもたち自身のジェンダーの表現のあり方をどれほど狭めてしまうかについて議論していますか？【A1/9/e)】

・大人や子どもが行う様々なケアに関わる仕事は、性別に関係なく評価されていますか？【A1/9/l)】

10月 日本の文化や慣習

・教職員は、子どもたちの家庭の文化や家族の状況の多様性に気づいていますか？【A1/11/a)】

・大人も子どもも、自分の文化とアイデンティティが尊重されないことが、とても不快な経験になりうることを認識していますか？【A1/11/c)】

・大人は、学校、教材や掲示、学習活動における家庭の知識との接点に、自分自身や自分の背景が反映されていると全ての子供が確実に思えるようにしていますか？【A1/11/d)】

11月 正常性をめぐる観念

・体重を理由に人を低く評価することを差別だと見なし、対策していますか？【A2/7/i)】

・大人も子どもも、やせていることを過大評価しないようにしていますか？【A2/9/d)】

・大人も子どもも、マスコミや自らの文化における美しさに関する固定観念に対抗することを促していますか？【A2/9/e)】

1月 学校の行動指針(the behavior policy)

・学校の行動指針は、子どもたち・親・教職員とその組合からの幅広い意見と合意にしたがって明確に書かれ作成されていますか？【B2/6/a)】

・学校の行動規範は、大人と子どもの両方に適用されていますか？【B2/6/b)】

・学校の行動指針は、実践の中だけでなく、学校の方針や学校文化の中にある学習と参加への障壁にも注意を向けていますか？【B2/6/j)】

・学校の行動指針は、声を出せずに悩んでいる子どもを元気づけることに注意を払っていますか？【B2/6/m)】

※文末の表記は、『インクルージョンの指針』のセクション・指標該当部分を示すものです。例：【A1/9/e)】→観点Aのセクション1/指標9/e)
※12月は授業実践のためスキップ

インクルーシブな学校づくり研究会の1年の流れ(2024年度)

月	主なトピック	
6月	キックオフ、オリエンテーション	社会モデルに関する知識に触れ、意見交換を通して理解を深める
7月	社会モデルを学ぶ	
8月	社会モデルを使う	
9月	子どもの権利について学ぶ①	インクルーシブな学校づくりを進めるための新たな知見を得る
10月	子どもの権利について学ぶ②	
11月	子どもの権利について学ぶ③	
12月	子どもと社会モデルを考える授業検討会	グループで検討し、多様な視点を取り入れる
1月	学校の中のバリアを考える「学校行事」	
2月	実践共有	自身の取り組みについて振り返る
3月	実践共有	




研究会のみなさんとバリアフリーセンターのメンバー(夏)


研究推進校のみなさん


研究会のみなさんとバリアフリーセンターのメンバー(冬)

課題を見つけるために

02

教員が自分の学校を点検してみる

—研究推進校の取り組み





自分の学校からひろげる

2024年度は、インクルーシブな学校づくり研究推進校として活動していくにあたり、まずは学校の中の教員たちが自分たちの学校を点検するところからはじめたいということで、『インクルージョンの指針』の2000の質問項目に管理職が一つ一つ目を通し、今の自分たちの学校で重要になっているのではないかと思う項目を洗い出していく作業が行われました。

各学校が選定した項目は、次ページの「インクルージョンの指針：◯◯小学校版」をご覧ください。

吹田市立高野台小学校では、この取り組みについての「学校だより」を発行し、保護者の方にも知ってもらおうと活動を広げています。



人権委員会のみなさんとバリアフリーセンターのメンバー

研究推進校として取り組んで…

吹田市立千里第三小学校 人権委員会

今年度、インクルーシブ教育研究推進校としてまず何から始めるのか？というところからのスタートでした。まずは、「学校の現状を知ろう！」ということで、教職員の意識を知るために、2000項目のインクルージョンの指針から、管理署・人権委員会で30項目の設問に絞り、教職員にアンケートを行いました。原文を日本語に訳した設問で、なかなか答えに悩むものも多く、『ここが本校の課題だ！』というものが見つかるところまではいかなかったように感じています。しかし、このアンケートを行ったことで、まずインクルーシブ教育に取り組んでいるはずの私たち教職員が、そもそもインクルーシブとは？社会モデルってなんだ？個人モデルって？という基本的な考え方をしっかりと理解できてないのではないかということに気づくことができました。次年度以降、この辺りの学びを深めていきたいと考えています。

また、「子どもと社会モデルを考える授業」にも取り組みました。今まで「インクルーシブな学校づくり研究会」で検討・実践された教材や指導案をもとに、2・3・5年で取り組みました。この授業に取り組んでみて、思っていた以上に子ども達の考えが深く、「それってその人にも事情があったんじゃないかな？」など、相手のことを意識した発言などもありました。本校が人権教育で取り組みを積み上げてきたことと子どもたちがリンクさせ、考えることができているように感じました。3年生は2つの授業に取り組み。どの授業もどの学年でやっても、それぞれの感じ方があり、深めることができる教材だったと感じています。

今年度推進校として学んだことを、さらに深めることができるよう、人権員会を中心に次年度の取り組みについてインクルーシブ教育の視点とつながりを持って進めていきたいと改めて感じています。

インクルージョンの指針：吹田市立千里第三小学校版

- ☑ 1. 教職員は、子供たちを半人前としてではなく、自分と同じ一人前の人間として見ていますか？
- ☑ 2. 教職員は、腹を立てたり、不満を感じたりする時も、子どもたちに敬意をもって話していますか？
- ☑ 3. 教職員と子どもは、授業を難しいと感じている子どもが持つ否定的な考え方に変化をもたらそうと試みていますか？
- ☑ 4. 教職員は、子どもたちの現時点での成果に基づいて、優れているとか劣っているといったラベルを貼らないようにしていますか？
- ☑ 5. 大人は、お気に入りの子をつくることを避け、特定の子どもを毛嫌いするようなあらゆる感情を捨て去っていますか？
- ☑ 6. テストでよくできる子を含む到達度の高い子どもと同じくらい、到達度の低い子どもの努力が評価される機会はありますか？
- ☑ 7. いじめは、身体的暴力だけでなく、言葉や感情的な苦痛にも関わると捉えられていますか？
- ☑ 8. いじめは、加害者が弱い立支援を必要としてる可能性があるというサインとして取られていますか捉えられていますか？
- ☑ 9. 学習活動では、個別やクラス全体の活動だけではなく、ペア活動やグループ活動の機会を提供していますか？
- ☑ 10.不安定な子供や、上の空の子ども、また不満を抱いている子どもたちの学習への参加に特に注意が払われていますか？
- ☑ 11. 子どもたちは、何かわからないことがあるときには言うように推奨されていますか？
- ☑ 12. 教職員は、障害(インペアメント)のある子どもの参加に必要な調整を行っていますか？

インクルージョンの指針：吹田市立高野台小学校版

- ☑ 1. 子どもたちは、自分の教室や学校を安心できる居場所だと感じていますか？
- ☑ 2. 教職員は、子どもたちを半人前としてではなく、自分と同じ一人前の人間としてみていますか？
- ☑ 3. 教職員は、学習や参加への障壁の原因を、子どもの欠点や障害に見出さないようにしていますか？
- ☑ 4. 重度障害や重複障害がある子どもは主流社会の一員になれないといったような態度に対して、異議が申し立てられていますか？
- ☑ 5. 教職員は、障害（インペアメント）のある子どもの参加に必要な調整を行っていますか？
- ☑ 6. 他人に対する偏見は、誰もが吸収してしまうものであり、気づき減らしていくためには努力が必要だと認識していますか？
- ☑ 7. 子どもたちは、他者と違うと感じることは普通のことで、問題ないということを学んでいますか？
- ☑ 8. 教職員は、子どもたちが自分の働きで学校（社会）を変えられると感じられるよう後押ししていますか？
- ☑ 9. 出席への障壁は小さくなっていますか？
- ☑ 10.個別に大人の支援を提供することよりも、協働する学校文化から生まれる仲間同士の支え合いを育むことが優先されていますか？（大人の 100 より子どもの 1）
- ☑ 11. 教職員は、新しいアプローチや活動に挑戦するよう、互いを促し合っていますか？

学校だよりから

吹田市立高野台小学校 学校だより 12月号（No.9）令和6年（2024年）11月29日発行



村上 弘明
吹田市立高野台小学校 校長

インクルージョンの指針

本校はインクルーシブ教育研究推進校として市内の学校に先行して取り組み始めて3年目になります。おおざっぱな捉えではありますが、つまるところ、この取組はさまざまな状況で生じる少数派と多数派について考えてみる取組だと捉えています。そしてそこが奥深く価値あるところだと思っています。なぜなら子どもたちを含めて私たちは誰もが多数派にも少数派にもなり得るからです。見方やルールを変えてみることで、みんなが参加できたり楽しめたりするのではないか、多数派にとってだけやりやすいものになっていないか、こういったことに気づいたり考えたりしていく学習活動です。学習を通して身近なところから、これからの世界を担う子どもたちが価値観を揺さぶられ豊かにする機会に出合わせていきたいと思います。

『インクルージョンの指針』というものがあります。この『インクルージョンの指針』はイギリスで出版されたもので、学校のあらゆる場面をインクルージョンの観点から、教職員が改善することをサポートするためのガイドブックです。2000の設問を通して学校の現状を振り返ることができます。この『インクルージョンの指針』を基にして、高野台小学校では、今年度の研究にあたって、インクルーシブな学校づくりを進めていくために大切にしたい指針として、【インクルージョンの指針：高野台小学校版】を選定しました。

11の指針を選定するにあたっては、2000ある設問の中からまず30の設問に絞り、教職員全員で意見を交わしながら11の設問を選び出しました。とてつもない量でしたが、頭が沸騰しそうになりながら教職員で白熱して議論した時間は有意義でした。これで完全というわけではなく、これら以外にも大事なことはたくさんありました。その中でも高野台小学校で特に大事にしたいことの中のさらに大事にしたいことを選んだ、という感じです。

自分たち教職員はこうありたい。学校はこうでありたい。忘れずにいたい。近づきたい。まだまだ不足している。心がけている。それぞれの設問に対して私たちが感じることもいろいろです。めざすものでもあり、願いでもあり。折に触れて立ち返りながら、私たち教職員自身の現在地、学校としての現在地を見つめていくものとして大切にして、取組を進めていきたいです。

リソース集

もっと知りたい人のために

インクルーシブな学校づくりを進めていくために様々なリソース(資源)が必要です。
ここでは活用できる教材や参考になる情報を集めました。

子どもと社会モデルを考えるための教材

教材を使って子どもと学びたい人のために

社会モデルは社会が多数派に合わせて作られていることで生じている偏りとそれにより少数派に押し付けられているバリアを理解するための「発見装置」です。この社会モデルという発見装置をうまく使うために必要な視点を6つに整理し、それぞれの教材がどの視点を重視しているのかをレーダーチャートで示します。

3つの教材を通して学ぶ社会モデルの6つの視点

社会の仕組み	社会は多数派に合わせたかたよりがあり、少数派に合わないことがある	多様性	目に見える違いだけでなく、目に見えない違いも存在する
バリア	自分には便利な環境でも、他の人にはバリアになることがある	公平性	みんなが平等に参加するには、それぞれに合った調整が必要
思い込み	気付かないうちに持っている思い込みや先入観がバリアになることがある	共生	分けるのではなく、共に生きる仕組みや環境をつくる

パワーポイントスライド・指導案

バリアはどうしてできちゃうの？

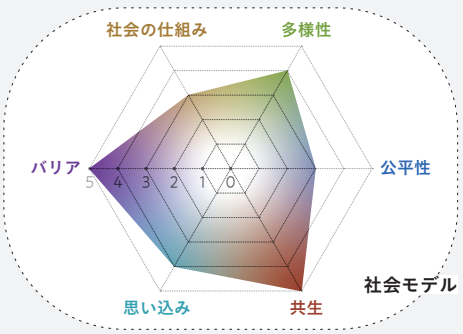
キーワード　バリア、バリアフリー、補助犬（盲導犬・介助犬・聴導犬）、社会モデル

推奨学年　小学校2年生以上

開発：東京大学バリアフリー教育開発研究センター
公益財団法人日本補助犬協会（共同開発）
教材・教具：パワーポイントスライド（イラスト・動画入り）、指導案







動画・指導案

迷惑なのはだれ？

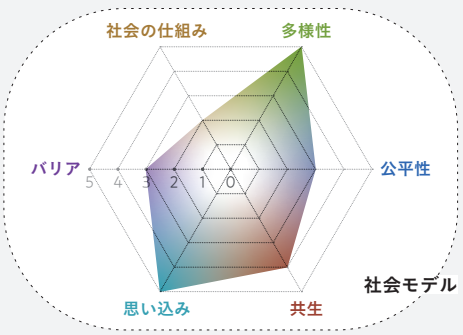
キーワード　他者理解、心のバリアフリー

推奨学年　小学校4年生以上

開発：東京大学バリアフリー教育開発研究センター（2018年にNHKが改編、NHK for School u&i「クイズ！一番悪いのだ〜れだ？」で公開）
教材・教具：動画（NHK for school）、指導案
URL https://www2.nhk.or.jp/school/watch/bangumi/?das_id=D0005190178_00000







紙しばい・指導案

車いすユーザーの社会

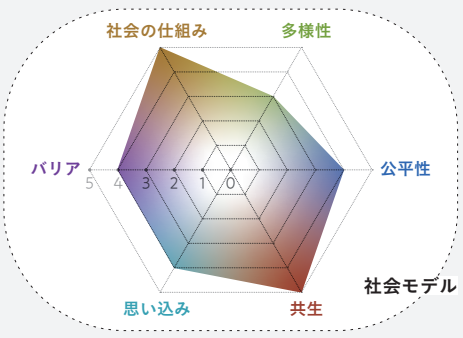
キーワード　共生社会、多数派／少数派、社会モデル

推奨学年　小学校5年生以上

開発：東京大学バリアフリー教育開発研究センター
教材・教具：紙しばい（パワーポイントスライド、お話のスクリプト）、指導案







インクルーシブ教育

動画　事例を知る

インクルーシブ教育とは？

インクルーシブ教育において重要な５つの理念が国際的な動向を踏まえてわかりやすく紹介されています

小国喜弘、東京大学
URL https://youtu.be/NUTKdkUD2ME

ウェブサイト　事例を知る

インクルーシブ教育リソース集

インクルーシブ教育を受けた子供たちの体験を綴った手記が投稿されているページです

東京大学バリアフリー教育開発研究センター
URL https://www.p.u-tokyo.ac.jp/cbfe/resource/inclusive/

動画　事例を知る

インクルーシブ教育が変えるもの【報道特集】

北海道旭川市の平田和毅さんの事例が紹介されています

TBS
URL https://www.youtube.com/watch?v=8BuUmZXK40s&t=59s

動画　事例を知る

障がいある人も共に学ぶ「インクルーシブ教育」の方法めぐり異議…『支援学級に在籍して通常学級で学ぶ』か『通常学級に在籍』か（2023年2月14日）

大阪府豊中市の小学校の事例が紹介されています

MBS News　URL https://youtu.be/RfQFpm2DXZs

映画　事例を知る

『みんなの学校』公式サイト

フルインクルージョンに取り組む大阪市立大空小学校を舞台にしたドキュメンタリー映画です

URL https://minna-movie.jp

動画　知識を身につける／アップデートする

インクルーシブ教育ってなに？（前編）

インクルーシブ教育について国際的な動向が動画で解説されています

認定NPO法人 DPI日本会議　URL https://www.dpi-japan.org/blog/workinggroup/education/online_lecture9-2/

動画　知識を身につける／アップデートする

インクルーシブ教育ってなに？（後編）

インクルーシブ教育について国際的な動向が動画で解説されています

認定NPO法人 DPI日本会議　URL https://www.dpi-japan.org/blog/workinggroup/education/online_lecture9-2-2/

PDF　知識を身につける／アップデートする

インクルージョンの指針：インクルーシブな価値に基づく学校づくりガイド（第４版）

［日本語訳］東京大学バリアフリー教育開発研究センター
URL https://www.p.u-tokyo.ac.jp/cbfe/resource/indexforinclusion/

動画　実践する

インクルージョンの指針とは

『インクージョンの指針』の概要と使い方を動画で紹介しています

飯野由里子、東京大学
URL https://www.youtube.com/watch?v=ECF6Da0ikME

障害の社会モデル

書籍　知識を身につける／アップデートする

『社会を扱う新たなモード―障害の社会モデルの使い方』

障害の社会モデルについて理解を深めたい方向けの読みやすい専門書です

飯野由里子／星加良司／西倉実季著、生活書院



動画　実践する

子どもと社会モデルを考える

教材「車いすユーザーの社会」についての解説動画です

飯野由里子、東京大学
URL https://youtu.be/bf05_YOfhMg

動画　知識を身につける／アップデートする

社会モデル

障害の社会モデルについての解説動画です

星加良司、東京大学
URL https://www.youtube.com/watch?v=uAs4pDMDJ3Y

記事　知識を身につける／アップデートする

“障害”ってそもそも何だろう？困難の原因を「社会モデル」から考える―バリアフリー研究者・星加良司さん

障害とは何か？について考える際に参考になる記事です

こここスタディ vol.13
URL https://co-coco.jp/series/study/socialmodel_hoshika/

動画　実践する

心のバリアフリー 映像教材 ダイジェスト版

大人向けに制作された動画「車いすユーザーの社会」のダイジェスト版が公開されています

公益財団法人ケアフィット共育機構
URL https://www.youtube.com/watch?v=EhSmXJTgTm8

合理的配慮

書籍　知識を身につける／アップデートする

『合理的配慮ー対話を開く、対話が拓く』



障害者差別解消法で定められた合理的配慮について理解を深めたい方向けの専門書です

▶ 川島聡／飯野由里子／西倉実季／星加良司、有斐閣

PDF　知識を身につける／アップデートする

令和６年度 高等学校入学者選抜の改善等に関する状況調査（公立高等学校）

高校入試における障害のある生徒に対する受験上の配慮の状況が報告されています

▶ 文部科学省　URL https://www.mext.go.jp/content/20250203-mxt_koukou01_000026790_1.pdf

PDF　知識を身につける／アップデートする

合理的配慮を理解する鍵は社会モデルにある

学校現場でよく見聞きされる誤解を取り上げながら社会モデルにもとづく合理的配慮理解のポイントを解説しています

▶ 飯野由里子、東京大学
URL https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2003385

アクセシビリティ

書籍　知識を身につける／アップデートする

『読み書き障害のある人へのサポート入門』



紙と鉛筆で学ぶのが難しい子どもが自分にあった学び方を見つけるのに役立つ読み書きサポートの入門書です

▶ 河野俊寛／平林ルミ、読書工房

動画　実践する

子どもが学ぶ環境を整えようーアクセシビリティの話

教室の情報アクセシビリティ確保についての解説動画です

▶ 平林ルミ、東京大学
URL https://www.youtube.com/watch?v=9wp6josLy1I

ウェブサイト　実践する

音声教材

紙の教科書にアクセスしにくい子どもたちのための電子教科書に関するページです

▶ 文部科学省　URL https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/1374019.htm

関連する法制度

法制度　原典にあたる

サラマンカ声明（原文）

▶ ユネスコ（1994）
URL https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000098427

法制度　原典にあたる

サラマンカ声明（日本語訳）

▶ 日本語訳（国立特別支援教育総合研究所）
URL http://www.nise.go.jp/blog/2000/05/b1_h060600_01.html

法制度　原典にあたる

障害者の権利に関する条約（略称：障害者権利条約）

▶ 国際連合（2006）日本語訳（外務省）
URL https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jinken/index_shogaisha.html

法制度　原典にあたる

障害者権利委員会（2016）インクルーシブ教育を受ける権利に関する一般的意見第４号

▶ 日本語訳（日本障害者リハビリテーション協会）
URL https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/rights/rightafter/crpd_gc4_2016_inclusive_education.html

法制度　原典にあたる

障害者権利委員会（2014）一般的意見第２号 第９条：アクセシビリティ

▶ 日本語訳（日本障害者リハビリテーション協会）
URL https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/rights/rightafter/crpd_gc2_2014_article9.html

法制度　原典にあたる

障害者差別解消法（「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」）

URL https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=425AC0000000065_20250601_504AC0000000068

法制度　原典にあたる

障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針（令和５年３月14日改訂）

▶ 内閣府
URL https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai/kihonhoushin/r05/pdf/honbun.pdf

法制度　原典にあたる

文部科学省管轄事業分野における障害を理由とする差別の解消の推進に対する対応指針（令和６年１月17日改訂）

▶ 文部科学省対応指針　URL https://www.mext.go.jp/content/20240117-mxt_tokubetu02-000033332_2.pdf

インクルーシブな学校づくり ハンドブック 2024

発行　吹田市立教育センター

企画・制作　学びプラネット合同会社
東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター

イラスト　川崎智子（教材：車いすユーザーの社会/バリアはどうしてできちゃうの？）
デザイン　小林文子

インクルーシブな学校づくりハンドブック2024に関するご意見がありましたら、ぜひお寄せください。

［連絡先］
学びプラネット合同会社
〒115-0044 東京都北区赤羽南2-4-7
Tel：050-3743-5622
Mail：info@manabiplanet.com
URL：https://manabiplanet.com

バリアフリー教育開発研究センター

学校をインクルーシブにしていくための活動はさまざまありますが、学校で取り組みの入り口として授業から取り入れることができます。吹田市では2021年度から、東京大学バリアフリー教育開発研究センターが作成した教材を用い、市内の小中学校で子どもと一緒に社会モデルについて考える授業実践に取り組んできました。授業実践に興味のある方は、バリアフリー教育開発研究センターのウェブサイトをご覧ください。

https://www.p.u-tokyo.ac.jp/cbfe/education/inclusiveschool

吹田市立教育センター／東京大学バリアフリー教育開発研究センター